

# 16. つながりあおう！ノコギリ歯形の町並みと町家の再生をめざして

黒江ワイワイ連絡協議会  
(和歌山県海南市)

## I. 活動の背景と目的

「黒江ワイワイ連絡協議会」は、和歌山県海南市黒江地区を対象地として伝統的町並み景観の維持発展と町家再生を目指し、町家や町並みの保存、再生活動をおこなっている。

海南市黒江は江戸時代から続く漆器生産地で、当時の面影を留めた町家や町並みが残されている。ノコギリ歯型の町並みは、一方からは切り妻の妻壁が重なって見え、反対側からは平側の正面が次々と後退しながら重なって見えるという独特の景観をつくっている。切り込みは深いものでは2mにもおよび、道路との間に残された三角形の空き地は、かつては漆器を運ぶ手押し車などが置かれていた。これらの建物は県内でも数少ない地域文化や歴史を現代に伝える貴重な歴史的遺産であり、また、現代においても店舗として、生活空間として、より豊かな空間を演出する可能性を秘めている。

しかしながら、高度経済成長以降の漆器業の近代化とともに、漆器関係家屋が地区外に移転し、歴史ある町から漆の匂が失われている。景観条例制定などの行政による対策もなされない中、黒江の特徴であるノコギリ歯形の町並みは、櫛の歯が欠けていくように連続性を失いつつある。残された町家も老朽化がすすみ、維持管理や建て替えに関して居住者は様々な困難な問題に直面している。しかしどこに相談していいものか、どのようにしたらいいのかもわからずに困惑している。また、空き家が増加するなど町家の新たな活用方法と町の活性化対策が求められている。

そこで、孤立している伝統的な町家の居住者と再生の専門的な知識や技術をもった熱意ある建築家、建築修復技術者、県や市の行政関係者、研究者などでネットワークを組織し、町家再生の実践活動に取り組んでいる。維持管理や建て替えなどの問題に直面している居住者に保存・再生に向けての知識、技術を提供し、「古い町家もまだまだ修理して使える」ということを理解してもらい、さらに、具体的な建物の保存と再生を目指した対策を立案するなどのさまざまな活動を展開している。

## II. 活動の内容

### 1. 京町家再生から学ぶ研修会

和歌山県は伝統的家屋再生の先駆的な事例が少ないために、他府県の先進事例を参照する中で町家再生の示唆を得る活動が



黒江のあがえ  
地域コミュニティの核として再生活用  
している



京町家再生事例



京町家再生現場

ら本年度は取り組んだ。数々の先駆的事例をもつ京都の町家が対象となり、再生事例の見学、学習会を企画した。和歌山県のメンバーに加え京都工芸繊維大学の松田先生と学生も参加し、活発な議論がおこなわれた。再生町家はうなぎ屋の尾関家、葎屋町京町屋再生現場、骨董店「幾一里」である。昨年度までの検討会では把握できなかった再生途中の様子や再生後の住み心地などについて居住者から直接窺うことができた。また、葎屋町京町家再生現場では棟梁の話を探いながら工事途中段階が見学でき、耐震補強方法や修理技法面での検討材料もそろい、修復面で非常に参考になった。

## 2. 「黒江のあがえ」の修理と再生活動支援によるネットワークの拡大

「黒江のあがえ」は、中心街である川端通りの空き家を地域コミュニティの核として、あるいは文化・情報の発信拠点として再生活用している町家である。皆のための空間づくりを目指し、「自分達の家」という意味の方言「あがえ（我が家）」に因み名付けられた。ソフト面での成果をみたが、家屋は長年、空き家で放置されていたために老朽化に伴う補修、修復が早急に求められている。建物の再生に関するボランティア育成を兼ねて、建具屋や大工をも交えて修理検討会を開き、屋根、建具、壁の部分修理と植木の伐採をおこなった。さらに、町のキーステーションとして機能させるため、ソフト面での再生活動の支援をも実施した。

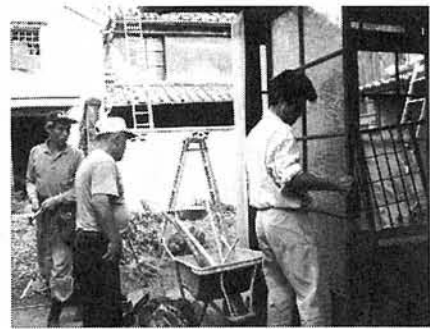
## 3. 登録文化財申請にともなう調査活動

昨年度までの活動で居住者がかかえる伝統的町家の問題を検討するための十分の体制ができていたが、今年度からは具体的に、居住者から相談や調査依頼がくるようになる。

まず、尾崎家から登録文化財申請にともなう調査と申請書類作成の依頼がある。尾崎家は漆器問屋を営むが、徳川時代には紀州藩の地士であった家柄で、500坪に及ぶ屋敷内には近世期の座敷棟以外に大正中期建築の主屋、蔵数棟と武家屋敷の風格を誇る長屋門が配されている。さらに川端通り西端に位置する池庄漆器店からも登録文化財申請の要望が出される。江戸時代後期の建物と推定され、この地区の町家の代表する建物のひとつである。これら2件の調査と申請書類作成を終える。

## 4. 家屋不陸測定と材の腐朽状況調査

また、8月には家屋の傾きが著しい池庄漆器店から調査依頼があり、和歌山県文化財センターチームを中心に調査に取り組む。家屋不陸測定調査や材の腐朽状況の確認などにより構造体の状況確認がおこなわれる。その結果西隅に向け、かなり傾き、構造的には補修、補強を要するが、再生の可能性は十分あると判断される。“新築か？再生か？”で揺れていた居住者も登録文化財の申請を視野に入れながら、既存家屋を修理・修復し、再生することを決意する。



あがえの修理



あがえの活用風景



登録文化財申請町家

## 5. 町家再生にむけての活動

池庄漆器店再生は、まず既存資料を基に家屋や生活財の調査をし、平面図、配置図を作成することから始められた。今回、再生の対象となった主屋は江戸末期頃の建物と推定され、平面形式は整形四間取り型の黒江の典型的な間取り形式である。並行して建物の老朽度、各材のチェックもおこなわれた。4代続く漆器問屋であり今後も店舗として活用する予定で、居住者と何度も協議する中で修正を重ね、伝統的な形式を生かした計画案を提示する。外観は現状を大きく変容させずに、格子などの伝統的な構成要素を上手く整備しながら町並み景観を守っていく方向とし、主要構造材は触らず、必要に応じて補強しながら、再生する方向とする。さらに、建て起こす方法は、京町屋再生事例と同様に屋根瓦をのせたままでおこなう方法をとることとなる。

### III. 活動の効果および今後の課題

歴史的町家、町並みを活かした町づくりに向けて、ネットワークや活動対象の拡大と内容を発展させることができた。具体的な成果としては、町家（店・住居併用）再生事例を得た点である。しかし、対象家屋も含め黒江の大半の家屋が路地に面して建ち並んでいる現状を考え、建築基準法上の道路幅の問題は伝統的町並みや町家の継承を妨げ、ノコギリ歯形の町並み景観が崩れる大きな要因ともなっている。現実化するために、緊急時や防災にも配慮した何らかの対策を講じながらも、地方行政へ条例制定の働きかけ等の新たな段階の課題に取り組まなければならない。

他方、建築的な側面から形成された「黒江ワイワイ連絡協議会」のネットワークと町家活用面のボランティア組織「黒江のあがえ（我家）」との融合が図られ、建物の再生と活動の拡大が試みられた。黒江のあがえの修理はまだ一部だけである。専門業者により修理してもらったが、今後は修理面でのボランティアを募るなどの活動も含めて取り組んでいかなければならない。

黒江ワイワイ連絡協議会の活動は、歴史を活かした町づくりの契機となり、一応の成果は得られたが、今後は住民による保存組織ができることが必要である。さらに地元の建築家や施工業者が歴史的な建物の再生を手がけていく活動を展開することが町づくりの成果を問うと考えられる。黒江ワイワイ連絡協議会としては、それらの活動を活発にするために、啓蒙活動に力を入れていく課題が残されている。

各分野の地域の核となり、発展した活動へとすすんでいくことがネットワークが拡大し、新たなコミュニティに発展すると考えられる。

それらの活動を活発にするためにも各方面へアピールし、啓蒙活動に力を入れていく必要がある。



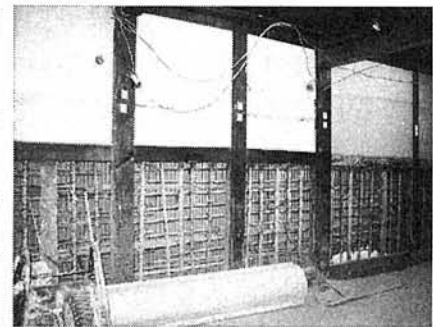
家屋不陸調査



材の腐朽状況の確認



再生計画検討会風景



修理が始まった再生町家